

牧師室から(2022.11.13)

前回「月の光」について書いたが、知らずも今夜（8日）は皆既月食だ。教会前のテーブルと椅子を前方に移動して、ワインと軽食で一時間ほど空を見ていた。そばのラベンダーの香りが、南仏プロヴァンスを感じさせる。行ったことはないけど。月食が始まった時にはまだ淡い光だったので、教会中に入り、ピアノの前に座り「月の光」を譜読みした。この曲のイメージは月の淡い光である。それから外のテーブルに戻って、千葉にいる妻と母に携帯で電話をして、月食を見るように言った。しばらくすると月が覆われ、全体が赤黒くなった。間もなく母から「この後どうなるの」という電話があった。「すぐに元に戻るよ」と答えたが、しばらくしてまた同じ電話がかかってきた。天体の動きが分かっている者にはなんてことはないが、年老いて記憶も定かでない母にとっては、この現象が不安で怖ろしく見えたのかもしれないと思った。思えば聖書時代の人たちもそうであったのだろう。

そのようなことを考えつつ、ぼんやりうとうとしてから空を見上げると、再び下の方から白い月が成長し始めていた。

「主の日、大いなる恐るべき日が来る前に 太陽は闇に、月は血に変わる。」

（ヨエル書 3 章 4 節）

（鈴木淳一牧師）